

- 本誌「エッセイコーナー」でお馴染みの高橋麗秋さん(日本音楽著作権協会会員)が新作「♪口笛ふいて」(発売: サウンドインプロモーション、1200円)のCDを発売し、カラオケなどで好評だ。

つい最近、筆者と高橋さんが所属している札幌北ロータリークラブの友好関係にある須賀川ぼたんロータリークラブの有志が来札し、友好を深めた。その際、薄野のスナックで作詞者である高橋さんが自ら皆の前で「口笛ふいて」のカラオケを披露。リズムカルな音程ながら勇気を与える感動の歌詞に一行は嬉しさを隠せないようだった。被災地の方に何よりのプレゼントでなかろうか。歌にお酒そして会話、遠方の友であるが時間を感じさせない友情を感じるひと時だった。『贅沢』とはこんなところ、こんな時にあるのである。

「♪口笛ふいて」作詞/高橋 麗秋 作曲・編曲/池田修二

(1)

泣くのは よせよ 笑顔を見せろ
俺が 口笛 吹いて やるから
*今は それが出来る ゆいいつの ことさ
男なら ところに いつも 大きな 夢を
燃やして 生きるのが 大事だからと
教えてくれた おまえじゃないか
俺が口笛 吹いて やるから

(2)

咲くのが 花よ 雨にも 負けず
俺が 口笛 吹いて やるから
明日は 虹色に 輝き 増すさ
喜びも 知らずに 命 捨てては ならぬ
一緒に頑張って ゆけるのならば
やり直しても いいんじゃないか
俺が 口笛 吹いてやるから
*くり返し

- これから北海道は楽しい(?)、厳しい冬を迎える。道民にとって暖かい室内でくつろぐ生活は欠かせない。ところが今冬は電力不足が予想され、節電に協力をと電力会社は声を高める。でも暖房の節電には限度がある。年配者、病弱者にとっては「ほど良いぬくもり」は必要不可欠だ。「エコ」の現在、昔はどうだったか。

江戸時代は衣食住に「エコ」が溢(あふ)れていたようだ。

町民が着ていたのは主に麻で、原料の大麻は育ちが早く、値段も安いという利点があった。町民は大麻の茎の繊維を「砧(きぬた)うち」といわれる手法で水に浸しながら棒でたたき、柔軟性とつやをもたせた。

機織りした着物は古くなると仕立て直し、別の着物に蘇らせた。さらに古くなると江戸期に流行(はや)った回収業者(古着屋)が集め、雑巾やおむつに替え、その後は燃料として使った。

コメは食料としてはもちろん、わらの部分はむしろや俵、壁材などに利用し、使えなくなったら燃料として再利用していた。もちろん、灰や町民の排泄物は田んぼで肥料に返し、循環化していた。

「電気も石油もないなか、最小限の資源で流れて逆らうこともなく、自然とともに生きていた。今を生きるヒントは、この循環型社会にあるのではないか」と話している人もいる。

- 「エコ」と言えば最近のタイヤは「エコタイヤ」が主流である。本誌に恒例の「スタッドレスオールガイド」を特集した。参考あれ。

今、北海道はスタッドレスタイヤ装着の時機となった。スタッドレスタイヤは交通安全の面からも環境問題からも優しい。タイヤメーカーはスタッドレスタイヤの開発に約30年近くの歴史を持つ。本誌はメーカーの開発当初からスタッドレスタイヤのテスト、インプレッションに携わってきた。

今年も12月頃、インプレッションを企画しているが肝心の雪、道路状況はいかになるか。気象台の予報が気になる季節となった。